



©うたごえはミルフィーユ製作委員会

「うたごえはミルフィーユ」
『手鞠沢高校アカペラ部と行く♪市内観
光プログラム (Produced by クマちゃ
ん)』

脚本 山中拓也

▼登場人物

ウタ	「小牧嬉歌」(15)
ムスブ	「繭森結」(15)
アイリ	「古城愛莉」(16)
レイレイ	「近衛玲音」(16)
ウルル	「宮崎閨」(15)
クマちゃん	「熊井弥子」(15)

○ランダムボイス

1 ウタ「えっと、あ、今探してるのは、パワー
2 スポット的なところ。あ、有名なところじ
3 やなくても……なんか、ありがたそうなど
4 ころ……あ、うん。実際にありがたいかよ
5 りも雰囲気で大丈夫。大事なのは気持ちだ
6 から」

7
8
9
10 ムスブ「は？ 何。聞いてなかった。ヘッド
11 ホンすんなって？ いいでしょ、別に音楽
12 聞きながらも。ああ、はいはい。わかっ
13 たわかった。で、なんか話すことあんの？
14 それ音楽より面白い話？」

15
16 アイリ「うーん（伸び）なんかいいよねえ、
17 この辺。都会でもなく、田舎でもなく、こ
18 のどっちつかずな感じが好きなんだよね。
19 ん？ 良い意味、良い意味。なんていうか
20 私たちみたいじゃない？ わかんない？」

21
22 レイレイ「いいね、こういうの。皆で散歩っ
23 ていうのも。住んでる街ではあるけど、改
24 めて歩くのってなかなかないもんね。京都
25 にいるとお寺行かないみたいな、よく言う
26 じゃない。うんうん、歩くには良い天気だ
27 し、よかったよかった」

28
29 ウルル「んー、なんかおもしろいものあったら
30 教えて？ せっかく歩くんだからさ、動画
31 の1個や2個撮って帰らんと。何がウケる
32 と思うー？ あ、そう。ここらへんってた
33 まにアルパカ歩いてるらしいよ。ガチガ
34 チ。私聞いたもん」

35
36 クマ「はあ……はあ……あの、ごめんなさ
37 い。運動不足で。あ、大丈夫……ちゃんと
38 追いつくから。ふう……みんな歩くのが早
39 い……」

1 オープニングボイス

1 アイリ「はい、じゃあ今日はこれで練習終わりー」
2
3
4
5 ムスブ「はあ？ 早くないですか？」
6 レイレイ「今日の部活は特別プログラムがあるんだよ」
7
8 アイリ「じゃあクマちゃん、発表よろしく」
9 クマ「あ、えっと……皆で、この街を観光しよう……プログラム……」
10
11 ウルル「ええや〜ん。行こ行こ。練習飽きたし」
12
13 ムスブ「いや、いい。練習しましょう。私たち今練習以外やってるヒマないです」
14
15 アイリ「ダメです」
16 クマ「あの、スポットを見繕ってきたので……あの、これ、しおる」
17
18
19

クマ、皆に手作りのしおるを配る。

20
21 ウタ「本格的だ……ー」
22 ウルル「デザイン凝ってるなー。クマちゃん、こつこつの好きなん？」
23
24 クマ「うん」
25 アイリ「ムスブちゃん、クマちゃんがこんなに頑張ったのに……行かないの？」
26 ムスブ「あー、もう。皆で行ってきたらどうです？」
27
28
29 ウタ「いや、でもこれ。多分。ムスブちゃんが市外だから……ムスブちゃんにこの辺りを知ってもらうため、じゃないかな」
30
31 クマ「うん……」
32
33 ムスブ「……何、だから？」
34 レイレイ「ムスブのために、クマちゃんがこんなに頑張ったのに」
35
36 ウルル「オムスビのために、手のマメを潰しながら……見て、クマちゃんの指、傷だらけ」
37
38
39 クマ「いや、無傷だけど……」
40 ムスブ「あー、はいはい。わかった！

もう、行きますよ。さっさと済ませましょ
う」
アイリ「やったー」
ウタ「ふふ、楽しみだね、クマちゃん」
クマ「うん……」

○コンプリートボイス

1 ウルル「じゃー！ コンプリート！」
2
3 ウタ「お、おつかれさま」
4
5 レイレイ「うん、すごく良かったね。充実し
6 た時間だったなあ」
7
8 アイリ「うんうん、みんなクマちゃんに拍手
9 っ」
10 クマ「あ、あ……ありがとうございます」
11 ウタ「あの、凄かったよ、クマちゃん。はじ
12 めてとは思えない案内っぷりで」
13 ウルル「なー、お金とったらええのに」
14 クマ「いやいや……あっ」

ムスブに駆け寄るクマ。

15
16
17 クマ「繭森さん……私たちの住んでる場所、
18 どうだった？」
19 ムスブ「……………」
20 ウルル「オムスビ、返事せいー」
21 ムスブ「……まあ、いいんじゃない」
22 ウタ「楽しかった？」
23 ムスブ「……まあ、意外と、楽しめた」
24 ウルル「うえーい、あのオムスビが楽しめた
25 って、相当プロモーションになるんじゃない
26 ね？」
27 レイレイ「たしかに」
28 アイリ「垂れ幕とか作る？ 『あのムスブち
29 ゃんも楽しんだ街』って」
30 ムスブ「やめろー！」
31 ウタ「部長ならやりかねない……」

○宣伝ボイス

1 ウタ「みんなと一緒に街を巡るんですか？」
2 レイレイ「ほら、ムスブは市外から来てるじ
3 やない？」
4 ウルル「ああ、そういやそうだった」
5 アイリ「まだこの街をゆっくり観光したこと
6 ないだろうから、案内したいねって話して
7 たんだよね」
8 ウタ「すっごく良いと思います！」
9 アイリ「クマちゃんがオススメスポットを選
10 んでくれたんだよね」
11 クマ「あ、はい……小さい頃からこの辺なの
12 で……」
13 ムスブ「は？ 何ムダ話してんの？ 練習
14 は？」
15 ウルル「ちょっとプライバシー！ 今内緒の
16 話してんの！」
17 ムスブ「そもそも今部活の時間なんだけ
18 どー？」
19 クマ「喜んでくれるかな……」
20 ウタ「ふふ、楽しみだね」

○鶴川駅・やすらぎ公園

ウタ・ムスブ・クマ

- 1
2
3
4
5 ムスブ「えっと、ここ？」
6 クマ「うん……やすらぎ公園」
7 ウタ「なんていい名前……」
8 ムスブ「駅前に公園か。アカペラの練習でき
9 そうじゃない？」
10 クマ「あ、うん……いいと思うけど」
11 ウタ「ちょっと勇気がいるかも……」
12 ムスブ「駅、工事中なのね。私バス通学だか
13 ら気づかなかった」
14 ウタ「あ、そうなんだよね。再開発の工事中
15 で、駅が豪華になるらしいよ」
16 クマ「お店とかも増えるのかな……楽しみ」
17 ウタ「駅前、気づいたらどんどん変わってい
18 ってるから、ムスブちゃんが次来たときに
19 はもっと変わってるかも」
20 ムスブ「ふーん、こっち北口でしょ？ 南口
21 には何があるの？」
22 クマ「ちょっと歩くと鶴見川がある……」
23 ムスブ「川？ そっちは行かないの？」
24 クマ「今回のルートには入ってないけど……
25 興味があったら、行ってみる？」
26 ウタ「カワセミがいるかも」
27 ムスブ「カワセミってなんだっけ。鳥？」
28 ウタ「うん、そう。市の鳥。ブルーの鮮やか
29 な鳥。かわいいよ」
30 ムスブ「まあ、興味はくない。今度行って
31 みるわ」
32 クマ「うん……良いと思う」
33 ウタ「あっ、あっ。でも気をつけて。鶴見川
34 を超えると別の市だから。というか、別の
35 県だから」
36 ムスブ「別にいいじゃない」
37 ウタ「なんか……ブれる、気がする……」
38 クマ「これ、市の観光だから……」
39 ムスブ「そんな厳密なの、これ。まあ、いい
40 や。そろそろ次のところ」

クマ「あ、うん……」
ウタ「ムスブちゃん、やすらいだ？」
ムスブ「は？」
ウタ「ここ、やすらぎ公園だから」
ムスブ「やすらいだやすらいだ」

○鶴川・香山園

アイリ・レイレイ・ウルル

アイリ「鶴川香山園。初めて来た」

レイレイ「うん、私も。オープンしたの最近だよね？」

ウルル「そうッスよー。2025年の1月。

私はオープンしてすぐ来たんスけど、雰囲気あっていい感じスよ」

レイレイ「瑞香殿っていうのが、主屋なのか。わ、スゴイよ。1906年の建築物だって」

アイリ「池泉回遊式庭園だー」

ウルル「え、あ？ ち、ちせん？」

アイリ「池泉回遊式庭園」

ウルル「なんスかそれ」

アイリ「池を中心に、その周囲を歩いて庭園全体を見ることができるよう設計された日本庭園」

レイレイ「江戸時代に発展した形式だよね」

ウルル「それ、2年生のテストに出るんスカ？」

アイリ「ううん、出ないから安心して」

レイレイ「あ、あっちにレストランもあるみたい」

アイリ「え、日本庭園のレストランなんて素敵」

ウルル「レストランの名前、桜梅桃李（おうばいとうり）なんスよ。かっこよくね？」

レイレイ「かっこいい」

ウルル「意味はわかってないスけど」

レイレイ「桜、梅、桃、李（すもも）の4つの花のことだね」

ウルル「え？ ん？」

アイリ「それぞれの花が持つ美しさは比べることはできない。人間も他人と比べるのではなく、自分自身の良さを磨こうね、という意味だね」

ウルル「テストには？」

1 レイレイ「出ないかなあ」
 2 ウルル「なんで知ってんスカ」
 3 アイリ「知識がマイブームの時期あったか
 4 ら」
 5 レイレイ「そうそう」
 6 ウルル「変な先輩」
 7 アイリ「桜梅桃李、私たちにピッタリな言葉
 8 じゃない？ せっかくだから寄っていこう
 9 よ」
 10 レイレイ「いいね」
 11 ウルル「それはさんせーい！」

ウタ・アイリ・ウルル

ウルル「薬師池公園だ〜。やっぱりこの街とい
えはここだよなあ」

アイリ「うん、キレイだよねえ。ハスの開花
は終わっちゃってるけど、この季節にはこ
の季節の良さがあるよね」

ウルル「まあ、咲いててほしかったけど」

アイリ「ピンクのきれいな花が咲くんだよね
え」

ウタ「でも咲いてないハスには咲いてないハ
スで、良いと思うんですよね。なんという
か……共感……」

ウルル「そういう類のものじゃないと思うけ
どなあ。でもすげーや。見渡す限りだも
ん。どんくらい広いのこれ」

アイリ「和光大学ポプリホール鶴川何個分か
なあ?」

ウルル「和光大学ポプリホール鶴川の大きさ
がわからんからピンと来んスね」

ウタ「3000平方メートルあるらしいです
よ、ハス田」

ウルル「ひっそ」

アイリ「ここに咲いてる大賀ハスは2000
年くらい前の種類らしいよ」

ウルル「ふっっる。スケールが違うッスねや
っぱ」

ウタ「ああ、こんな大きくて古いハスに共感
なんて言って申し訳なかったかもしれない
……15年しか生きていない小さき者が…
…」

アイリ「小さき者」

ウルル「うーたんってハスにも負けんの?」

アイリ「ふふ、また、咲いてるときに来よう
ね」

ウルル「そうッスね。ハスっていつごろが見
頃なんスカ」

ウタ「あ、夏だと思えますよ」

1 アイリ「じゃあ来年の夏。部活の練習帰りに
 2 でも」
 3 ウルル「そうッスねー。お？ てか、うーた
 4 ん、なんでそんな遠くに？ もっと近づけ
 5 ば？」
 6 ウタ「いや、ちょっと経験上」
 7 アイリ「経験上？」
 8 ウタ「あ、落ちたことがあるので。薬師池
 9 ウルル「何してんの？」

ムスブ・レイレイ・クマ

ムスブ「ん、こころへんなんかで見えたことあるな」

クマ「タイコ橋……だね……」

レイレイ「薬師池公園の象徴みたいところだから、ムスブが見たことあっても不思議じゃないかもね」

ムスブ「ふーん」

クマ「紅葉の時期だから、ちょうどよかったね……」

ムスブ「たしかに。キレイね」

レイレイ「この時期もいいけど。他の季節にくるのもいいんだよ。冬になったら松の木の雪吊りもやってるだろうし」

ムスブ「雪吊り？」

レイレイ「松の木に雪が積もっちゃうと折れちゃうんだけど、それを防ぐために木材と縄で補強するの」

ムスブ「はあ。補強を見に行くんですか」

レイレイ「見た目もなんだかキレイなんだよね。情緒があるというか」

クマ「はい……松の木の上に雪が積もってる様子も合わさって、良いですよね……」

ムスブ「想像がつかん」

クマ「あ、あ、冬があんまりなら……他の季節もいいよ。えっと、3月は梅で……4月は桜、5月は藤の花……6月はシヨウブ・あじさい、7月ハス……」

レイレイ「すごいね、調べてきたの？」

クマ「あ、はい……繭森さんに楽しんでもらえたらと思って……」

ムスブ「逆にプレッシャーなんだけど」

レイレイ「まあ、どの季節に見ても違う顔が見えるのが魅力ということ。少し足を伸ばすだけでそういう自然の中にいられるのは、こころへんの良さだよね」

ムスブ「まあ、そうですね。たまに気分転換

「で来るのはいいかもしれないですね」

3 ウタ・レイレイ・クマ

5 ウタ「はっ……リス園だ……」

6 レイレイ「あ、ウタ好きなんだっけ、リス
7 園」

8 クマ「今回のルートには入ってないけど……
9 行く?」

10 ウタ「んー、ううん……」

11 レイレイ「長考してる」

12 ウタ「いや、あのですね」

13 レイレイ「うん」

14 ウタ「……んー……うん……」

15 レイレイ「長考してるね」

16 ウタ「今回の目的は街を巡ることなので……
17 スルーで……」

18 レイレイ「なんで? 名所だし。行っても良
19 いと思うけど」

20 クマ「うん。私もそう思う」

21 ウタ「いや、行かない……リス園は、リス園
22 単体で来たほうが良いと思う……時間に追
23 われて行くリス園は、リス園じゃないから
24 ……」

25 レイレイ「リス園に対しての意識が高い」

26 ウタ「しかも皆で行くんなら、本当に、たっ
27 ぱり時間をとって……前日から体調を整え
28 て……」

29 クマ「そんなになの?」

30 ウタ「あ、というか制服で来ないほうがいい
31 かも。長袖長ズボン推奨」

32 レイレイ「リス園って私行ったことないんだ
33 けど、そんなに激しい場所だっけ」

34 ウタ「まずリスが約200匹いるんですけ
35 ど」

36 レイレイ「200」

37 ウタ「あと、ウサギとモルモットとインコと
38 へびとデグーもいます」

39 レイレイ「リス園なんだよね?」

40 ウタ「マールもいます」

ク マ ウ タ レ イ ウ タ

クマ「知らない生き物だ……」
ウタ「リクガメとイシガメも」
レイレイ「リス園なんだよね??」
ウタ「あ、私的なイチオシは園内の看板で
す。手書きゆえの狂気を感じて」
レイレイ「リス園なんだよね??」

ムスブ・アイリ・ウルル

アイリ「はい、どうぞ。ソフトクリーム」
ウルル「あざーす。おー、うまそう。写真撮
ろ」

ムスブ「ありがとうございます」

アイリ「4APARTMENTだぶるふおーあ
ぱーとめんと。良く行くんだけど。たまに
はテイクアウトして芝生で食べるのも素敵
だね」

ウルル「え、あそこ行きつけさ。オシャン
〜」

アイリ「そうなの。あ、1回ウタちゃんとも
行ったよ。レイレイと3人で」

ウルル「え、マジすか」

ムスブ「ウタをあんなところに連れて行っ
たら大変なことになるんじゃないですか」

ウルル「そうッスよ。うーたんって普通のチ
エーンのカフェでも緊張して文字数の少な
い飲み物しか頼めないんスから」

アイリ「うん……ふっ、ふふ……」

ウルル「思い出し笑いしとるやん」

ムスブ「なんかやらかしたんですか」

アイリ「店員さんに飲み物聞かれて『何か差
し支えないものを』って答えてた」

ウルル「可哀想に」

ムスブ「でも、ここいいですよ。気持ち
い」

ウルル「なー」

ムスブ「ここでアカペラとか、いいんじゃない
ですか」

アイリ「だよ、私もずっとそう思ってる
の。この白いベンチにお客さんが座って、
私たちはその前をステージに」

ウルル「えー、いいやーん。アカペラって野
外でやるもんなんスか？」

アイリ「うん、国内の有名なアカペライベン
トはだいたい野外だよ」

1 ムスブ「いいんじゃないですか。やりましょ
2 うよ、ここで」
3 ウルル「アイリさんならいけるんじゃないス
4 か？ 繋がってそうじゃん？ 行政と」
5 アイリ「私そういうイメージなの？」
6 ウルル「内部に入り込んでるイメージ」
7 アイリ「ふふ、じゃあ政界入り頑張っちゃお
8 うかなあ」
9 ムスブ「そこまでやれとは言っていないでし
10 ょ」

ムスブ・ウルル・クマ

ウルル「やば！ なつかしー」

クマ「だよね……ここは寄りたくて」

ムスブ「ん、ここは何？」

クマ「子どもセンター まあちって言って…

…この地域の子どもたちが集まって遊べる
場所なの……」

ムスブ「ふーん、アンタも来たことあんの？」

ウルル「あるある。わー、記憶が蘇ってきた。このダンスルーム使ってたんよ。私

昔ダンスやってたから」

クマ「え、そうなんだ……かっこいいね…
…」

ムスブ「アンタ踊れんの？」

ウルル「そこそこ。まあ飽きてやめたから偉
そうなことえんけど。でも、「」はいい
よなー。何かやろうとしたらいていある
もん」

ムスブ「本当だ。プレイスペースに、クッキ
ングルーム……」

クマ「音楽スタジオもあるから…もしかした
ら部活で使えるかも」

ムスブ「え、いいじゃん」

ウルル「でもさ。なんでここにしたん？ 他
にも回っておもろそうところありそうなの」

クマ「うん、えっとね。私小さい頃、下の子
たちとここによく遊びにきてたんだけど。

こっつて、18歳までしか使えないんだよ
ね……」

ウルル「あ、そうなんだ。セーフじゃん」

クマ「私たちはまだ子どもなんだなって思う
のも大事だって」

ムスブ「どういふことか？」

ウルル「あー、つまり無理に大人にならなく
ていいこと」

クマ「そう」

ムスブ「よく今のわかったな」

ウルル「はーん。ロマンチッククマちゃんや
ん。じゃあここが使えるうちにいっちゃど
ッジボールでもしてく？」

ムスブ「え、疲れるから嫌なんだけど」

クマ「あと、私たちがここで育ったんだよっ
て、繭森さんに知ってほしくて……」

ウルル「知ったか！ オムスビ！ 刻みつけ
たか！？」

ムスブ「はいはい、わかったわかった」

○小田急町田駅ビル東口広場

ウタ・ムスブ・ウルル

ウタ「はっ、はっ、原町田七福神の1つ大黒
天がいる東口広場だ！」

ウルル「え、こわ」

ムスブ「何、急に」

ウタ「あ、えっと市制50年を記念して七福
神の像が立てられたんだよね。あ、私はも
ちろん全部見に行ってるんだけど、せっか
くだから皆にもありがたがってほしくて」

ウルル「ありがたがってほしいって何だ」

ムスブ「あー、アンタ縁起物好きだから」

ウタ「そう、七福神なんてもう……縁起その
ものだから」

ウルル「あー、まあパワースポットってこと
か。それならまああやかるところかなあ」

ウタ「うんうんうん」

ムスブ「別にまあいいけど」

ウタ「しかもここにいるのは大黒天なんだ
よ。福の神！ 私たちにピッターリ！」

ウルル「そうなん？ 何の神様なんだっけ大
黒天って。あれっしょ？ 袋持った人」

ウタ「そうそう。商売繁盛の神様だからウル
ルちゃんにピッターリかなって」

ウルル「え、マジ？ ええやん。MeTube運
あがりそうやん」

ウタ「そうなの。そして開運の神様でもある
から私にピッターリ……」

ウルル「オムスビは？」

ウタ「あ、えっと。大黒天ってインド神話に
出てくるシヴァって神様の化身で、シヴァ
は破壊と創造の神だからムスブちゃんにピ
ッターリ」

ムスブ「望みどおり破壊したろか」

ウタ「ひい！ 創造もするからー！」

ウルル「なんかふくよかなおじさんじゃなか
ったけ大黒天。そんないかつい感じな
んこ。」

ウタ「うん、今のにこやかな感じになったのは室町時代からしくて」

ウルル「年取って丸くなったんだ。元ヤン？」

ウタ「そういう解釈もありかも」

ウルル「そかそか。オムスビはまだ現役のシヴァだから、大黒天になれるといいなあ」
ムスブ「なに、現役のシヴァって」

アイリ・レイレイ・クマ

アイリ「あ、待って待って。寄っていい?」

レイレイ「ん? ああ、まちの案内所」

アイリ「名産品が売ってるんだよね。市内の認定されたお菓子とか食べ物とか」

クマ「あ、お土産探すのにいいですね……」

アイリ「ムスブちゃんにどれか買ってあげようかなーって」

レイレイ「改めて見てみるとさ。いろんな名物があるね」

クマ「ですよ、ジャンルがバラバラというか……」

アイリ「不思議だよね。全然違うものがひとつの街の名物になってるの」

レイレイ「私たちみたいじゃない。性格も考えてることもバラバラだけど、ひとつの場所に集まってる……」

アイリ「……………」

レイレイ「上手いこと言ってない?」

アイリ「もう少して感じ?」

アイリ・レイレイ「(笑い合つ)」

クマ「私は……じっくり来ました……」

レイレイ「あ、良かった。クマちゃんには刺さってた」

クマ「部長は、洋菓子ですよね……レイレイ先輩は、和菓子かも……」

アイリ「あ、おもしろいね。ウルルちゃんは流行り物っぽい感じがいいな。映えそうなお菓子」

レイレイ「クマちゃんは意外とコーヒーって感じかもなあ。じっくり落ち着いた時間を過ごせそうじゃない」

クマ「ウタちゃんは味噌……」

レイレイ「味噌。なんかわかる気がする」

クマ「繭森さんはマスタード……」

アイリ「すごい。もうムスブちゃん、マスタ

1 ードにしか見えない」
2 レイレイ「へえ、3年ごとに認定される名産
3 品が代わるんだって」
4 クマ「本当に、私たちみたいなのかもしれない
5 ですね。3年後には皆次の場所にいるわ
6 けだし……」
7 アイリ「……私も買って帰ろうかな。お土
8 産」
9 レイレイ「地元なの？」
10 アイリ「地元のお土産を買うのも、たまには
11 いいんじゃない？ このラインナップ、今
12 しかないわけでしょ？」
13 クマ「うん……買って帰りましょう」

3 ウタ・アイリ・ムスブ

5 ウタ「何か買っていきます?」

6 アイリ「さすがにここ来たらおなかすいちゃ
7 うよね」

8 ムスブ「仲見世商店街。なんというか、レト
9 ロですね」

10 アイリ「いい雰囲気でしょ。美味しいお店も
11 たくさんあるんだよね」

12 ウタ「よく行列できてたりしますよね」

13 アイリ「ムスブちゃん、何食べたい?」

14 ムスブ「なん(でもいいですけど)」

15 アイリ「なんでもいいは禁止ね」

16 ムスブ「……………ウタ、決めれば?」

17 ウタ「わ、私たちは割と来やすいから、ムス
18 ブちゃんが是非」

19 ムスブ「はあ、何があるんでしたっけ」

20 ウタ「えっと、中華、スイーツ、ハンバーガ
21 ー、ラーメン、タイ料理……」

22 アイリ「海鮮のお店もあるし、焼き鳥とか沖
23 縄料理も……」

24 ムスブ「……じゃあ」

25 ウタ「あつ、焼き小籠包はすごく有名。いっ
26 つも行列」

27 ムスブ「あ、そう。そしたら……」

28 アイリ「あ、テイクアウトなら大判焼きもい
29 いかも。味がいっぱいあるし」

30 ムスブ「そうですか。じゃあ……」

31 ウタ「あつ、ピリヤニっていうインドの炊き
32 込みご飯も——」

33 ムスブ「情報を小出しにするな——」

34 ウタ「ひっ」

35 ムスブ「じゃあ、(っ)っ」

36 ウタ「おおお……」

37 アイリ「……へえ」

38 ムスブ「え? おかしいですか?」

39 アイリ「ううん、ムスブちゃんの食の好み知
40 らなかったからさ」

1 ムスブ「私にも好き嫌いくらいありますけど」
 2 ウタ「考えてみれば……私たち、そういう当たり前のこと、知らないね」
 3 ムスブ「いや、そんなの当たり前でしょ」
 4 ウタ「でも、ムスブちゃんのこと、ちょっと知れて、よかった……」
 5 ムスブ「あのね、アンタはちょっとしたこと
 6 でエモーションナルになりすぎなのよ。ただ
 7 のご飯！ それだけ！ ほら、いくよ！」
 8 ウタ「は、はい……」
 9 アイリ「あはは、青春だなあ」